

カー『バクーニン』論 (2)

マックス・ネットラウ

II

一八六九一七〇年におけるバクーニンとネチャーエフの間の最も錯雑とした関係は、カー氏によって、彼の成果が過去の議論であるような乏しい材料を基礎にして、おざなりなやり方で取りあつかわれている。もしバクーニンの伝記作者があれば無知だから五二三ページで「彼（バクーニン）はマルセーユの新聞に書いたゲルツェンの無害な死亡記事のまえがきで：述べた」等々と書いてあるなら、その作者はまじめな研究者ではないし、論じている環境について正しく知らないのである。次の行でその論文から逐語的に引用している（五二三ページ）のであるから（「新聞がなかなか入らない諸国への遠い旅行」）、彼はこれらの言葉を即座につづったのではない。ゲルツェンの生涯をきわめて興味深く概観した一八七〇年二月六日号のその論文はパリの日刊新聞『ラ・マルセイエーズ』紙に発表されたが、この新聞は、その頃ヴィクトル・ノアールの殺害によって悪名高くなり、ピエール・ボナパルト公によって銃殺されたアンリ・ロシ

ュフォールの編集するその時代の最も進歩的な新聞であった。

今や、自分の居場所について民衆を誤り導こうとするバクーニンの告発された試みに関して悪意ある所見が、もちろん『ラ・マルセイエーズ』紙が指摘されている一八七三年のエンゲルスとラファルグの筆になる、悪評さくさくたるパンフレット『同盟』のなかで最初に登場する。おそらく、何人かのロシヤの無知なものがこのごたまぜをつくったのであって、カー氏はこれを「マルセーユのある新聞」（五二三ページ）と解釈しているか、書きかえているのである。『ラ・マルセイエーズ』紙は大英博物館にあるし、バクーニンの論文は評論誌『ラ・ヴィ・ウヴリエール』（パリ）、第六四号、一九一二年五月一二日号に再録された。「マルセーユのある新聞」ととりあげ、ついで鑑識眼ある魅力のよそおいをこらして、「無害の死亡記事」のように見ることのできなかつた論文について記すへまをやらかした男といかに論議できようか。

カー氏が五一二一三ページでマトレナ（マトリオナ）という署名のある記録について論じている（「マトレナ」に署名した言明が実在するかどうか）等々）ときには、非常に批判的な態度をとっているが、この事件がシ

ュニコフスキーによって納得が行くように説明された（私の伝記の四八九ページ参照）という事実には全く気づいていない。バクーニンは自分の個人的な意見としてネチャーエフに、ロシヤの「委員会」は何らかの極端な手段を採用することを当然とされるであろうと表明していたが、危なっかしい文書を手紙で請うたネチャーエフが、「委員会」への回送を手紙で請うことでこの意見を公表すべきであるとほめかしたとき、バクーニンは信用してではあるが愚かにもネチャーエフの要求に応じてしまった。マトリオナはマツェッパと関係ある婦人であった。それがすべてでラリからのまた聞きの証拠（一八九六一九〇八年）以外に、カー氏が批判的に記しているようなこの「話が真実であれ、誤りであれ」（五二二ページ）ということについてはシュニコフスキーとロスという言葉がある。

すべての読者が、バクーニンがこぞどろみみたいな怪しげな金もうけの行為で絶えず責められるのを見て、楽しむとはかぎらないであろう。だから五一八一九ページで四〇〇ポンドがバクーニンの手に渡り、「それからたぶんいくらか減らされて、ネチャーエフの手にいった」。だから、「おそらく」カー氏は、バクーニンが一部たりとも着服せずに他の人間に全額を引きわたすはずはな

らう、と私たちが信ずると予測しているのだ。私はネチャーエフの気質を嫌うが、どんな「伝記上の」犠牲者もがカー氏に共鳴する以上に、ネチャーエフに安んじて共鳴するであろう。

「リヨンでのおかしな失敗」を記している第二章において、カー氏はロシヤのスパイ、「ポストゥイコフ」（五五三ページ）によって創案された架空の旅行に信をおいている。「バクーニンはベルンで（ロシヤへもどる）途中の彼に会うためにロカルノからやって来た」。実のところ、一八七一年一月のバクーニンの日記にはそんな旅行の記録はないが、二六日にはこう書きとめてある。「ボスニコフから不快な手紙。ボスニコフとオガリョーフへ手紙（をおくった）」。おそらくこのことは、正体をあばかれていないスパイが横柄にふるまったこと、バクーニンはこのときまでにボスニコフにうんざりしていたこと、を意味するであろう。

こよみのなかへの彼の毎日の書き込みが、「別の情報」の時折のスクラップのなかにはさみこまれた収入と支出の大まかな日記帳は一八七一年の一月というちょうどその月に「はじまっていた」（五五三ページ）（正確な引用ではない）と誤って記されている。事実はまさしくこの反対である。書き込みが主として記録しているのは、

受けとったり出したりした手紙、原稿についての仕事、訪問者、運動についてのメモ、感想、その他であって、金銭的なデテールは、彼が借金で頭があがらないとき、入って来る金がいくらあるとき、債権者に支払い金をはらったとき、等々にのみ記されている。こうした日記が一八七一年一月にはじめられたと仮定するどんな理由もないし、一八四八年にベルリンでつくられた同じようなノートは発見されているのである。しかし、一八七一年の大部分、一八七二年の全部、一八七四年の数カ月のノートだけが破壊と損失をのがれたようである。

一八七〇―七一年の冬の間、バクーニンは自分の大著の根幹をつくりあげたが、『神と国家』はその限られた一部のみを構成する。カー氏はバクーニンの知的な活動に注目していないし、読者はそのようなテーマすべてについて無知——大著が向けられる人類の活動に信じられないほど関心が欠落していること——のままにされている。『同盟』についての第三〇章はかなり用意周到に企てられてはいるが、現存する資料について十分なるどんな知識をもとにしているのではない。創立者たちが自分たちの目的を表明するために社会でなく社会主義者という用語をわざわざ採用したというのに、なぜ「社会主義者民主同盟」という団体の名前すらも「社会民主

けれども、私は後者を選ぶ。

(つづく)



翻訳のテキストは不鮮明に印刷された辞書なみの小さな活字から成り、きわめて読みにくく、コンテキストからやると判読しえた箇所もかなりあるだけでなく、錯雑とした重複、誤植、句読点や疑問符の脱落などがかなり頻出するが、これらをもっとも正しいと思われるように修正して訳出した。

カー『バクーニン』からの引用は大沢正道氏の訳文を拝借し、散見される誤訳や不適訳は訂正し、いくらか手を加えた場合もある。ネットラウの指摘するカーの著書のページ数は大沢訳に相当するそれになおし、指摘されていない場合も大沢訳のそれを示して読者の便をはかった。(：)は(：MN)でないかぎり私のつけた補注であり、カーからの引用文は大体がイタリック体にされていたが、これはあまり重要と思われないので無視した。

多くの訳注の必要性も感じられるが、スペースの都合で省略した。せめて論文中にしきりに出てくるネットラ

盟」として提示されたのであろうか。「社会民主」は、社会主義者とはなく社会改良家とみなされたがっていた人々によって使用されたフランス語の「デモクラティック・エ・ソシアル」にもとづいているドイツ語の「ゾシアルデモクラティッシュ」を複製したものである。

「ルクリュ兄弟」を、フランス帝政の間すべての種類の自由主義的な心性の人々とひんばんに関係していたというのに、誰が「革命家というよりむしろブルジョア的急進主義者」(五六三ページ)と記述するであろうか。バクーニンは、ナボリの同盟によって(五六四ページ)ではなく、地方インタナショナルの職業部会の一つである金属細工師たちによってパーゼル会議へ派遣されたのである。

「マッチーニが実際にあるときロカルノのバクーニンを訪問した」(五六五ページ)というのは私には初耳である。どんな権威も他のものも全く新奇なことであるこうした叙述にぶつかったことはない。では、私は何をなすべきか。私は本書のほんのわずかな部分できわめて多くのまごうことない誤りにとりかかえることにする。私はこうした叙述を信ずべきなのか、それとも疑問にすべきなのか。私には未知のマッチーニについてのほう大な文献がこの不可解な事実の証拠を含んでいるかもしれない

ウの原稿のまま『バクーニン』伝の該当箇所の説明でもと思ったが、手書の原稿でおいそれとは読めないもので、これは割愛した。

私の推定に誤まりがなければ、この論文を手軽に読めるのは、ごく少数のものを除けば、今のところ「リベルテール」誌の読者だけであろう。

この論文には、初出掲載誌の編集者によるコメントがついているので、それを全文以下に訳出しておく。

以下の論稿、三編から成る第一のものは単なる書評ではない。これはE・H・カー教授の著書『ミハイル・バクーニン』(マクミラン・アンド・カンパニー、ロンドン、一九三七年、「原書で」全五〇一ページ)への注意深くドキュメントされた回答であって、バクーニンについての現存する最大の権威の一人として広く認められているマックス・ネットラウによって寄稿された。

現在、『スペインと世界』誌の誌面はすべて現代の諸問題にふりあてられるべきである、と考える読者がいるかもしれない。もしもカー教授のバクーニン解釈についてのこの詳細な批判が他の何らかの回路によってイギリスの読書界に届くであろうと確信がもてるならば、私たちはそうした意見に同意したい気にもなる。しかしな

から、マクミラン社がこのテキストをパンフレットの形態で刊行するとはおもわれぬし、資本主義新聞のいずれかがそれを評論として刊行しようと考へるとも期待できない。このような主題に関するそれらの評論は大体が題材に精通していない人々によって執筆されるのであって、かくしてその批判はそれぞれの叙述の真実を求めるのではなくて、文学的なスタイルや形式に集中する。『マンチェスター・ガーディアン』紙に現われた評論はこうした種類の批判のみごとな一例である。

この一連の諸論稿を発表するにあたって、私たちは二つの目標に寄与したい。第一は本書の詳細な分析を公表することである。第二は、論ずる主題にほとんどまたは全く共感をもっていない人々によって執筆された著書に浸透している歪曲、不正確、誤説に注意を促すこと、これである。わが国では「ロジャのアナキスト」について別の一書が出版されているし、共産主義者によって執筆されたものであるならば、全体の調子と主題が考察されている視点とは容易に想像しうるところである。ここでもやはりバクーニンは（当然のことであるが）共感をもつて論じられておらず、これらの著書を読むもの、実際の事実やドキュメントに通曉していないものは誤った意見を必ずやつくりあげるにちがいない。マックス・ネッ

トラウは、数えきれないドキュメントや文書をすべて自分の思うがままに利用して、バクーニンの生涯を執筆したことがある。この不滅の著書はその原稿のコピーが世界の多くの国立図書館で見い出されるはずであるが、将来の刊行者の意向にゆだねられている。そのときまで、私たちは他の人々のバクーニンについての著書にかんする彼の批判に満足せねばならない。これらの批判はそれ自体で詳細かつ入念な研究の小さな傑作である。

— 編集者

訳出した右の論文については今井順子「カーの『バクーニン』像をめぐって」(『アナキ』12号所収)に紹介があり、今のところこれに付言する材料はないので、その論文を参照して頂くことにして、こと改めて問題はつけないことにした。

(坂入純二訳)

運動センター定例会に参加しよう！
毎月第一・第三日曜日の午後一時から
太田区西蒲田のエンリコビル3F
アナキズム運動センターにおいて
運動センター定例会を開いています
アナキストの諸活動の場として
出撃拠点として
みんなの力で打ち固めていこうではありませんか
どうぞ参加して下さい

東京都太田区西蒲田7の61の4

エンリコビル3F

アナキズム運動センター

TEL 03・735・1246

(第一・三日曜 午後1時～5時)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

1974年8月15日発行 Vol, V, No 9

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)